



memoirs.06
リセットの日



延藤 詩喜

さつきから彼はパソコンモニターの右端を眺めている。もうかれこれ十分前からだ。そんなに睨みをきかせてないで、さつきとアプリケーションを閉じれば良いのにさ。俺には彼が、何考えてるか手に取るように分かるんだ。

パソコンモニターの時計が十八時ちょうどになったのを確認して、彼はパソコンの電源を落とした。彼の勤めるデザイン会社では、毎週金曜だけ就業時間通りに帰ることを義務づけられていたからだ。

彼の周りの社員らも一斉に帰り仕度をはじめていた。彼はデスクに掛けてあるコンバクトなブリーフ・ケースを手に取り、一度だけ経理課の隅に居る一際華やかな女子社員を見た。

——まったく。彼女だけはやめておきなよ。きつと彼女は君の良さなんて気づきはしないからさ。こんなところで黙って見つめちゃあ気味悪がられるぜ。随分前には痛い目だってあっただろう？ 少しは学習しようぜ相棒。はつきり言って心配なのさ。帰り際、いつもいつも遠慮がちに見つめる君が、哀れに思えて仕方ないのさ。どれだけ眺めていたって状況は変化しないぜ。そんな奴はほっといて、この前食事した彼女のことを考えなよ。顔はそれほど良かないが、愛嬌のある子だと思っぜ、俺は。

と、こんなことを思っちゃんいるが、結局俺は彼の掛ける眼鏡にすぎず、暖簾に釘押ししろうけどさ。まあ良いさ、今日はせつかくの金曜日じゃないか。いつも通りの儀式を済ませちまおうぜ。

さつきも言ったとおり、俺は眼鏡だ。彼の掛けるフランス製の丸眼鏡。就職祝い

に彼の親父が与えたアランミクリ。だから俺は彼とは六年の付き合いになる。俺の知る彼は随分と生真面目で面白みに欠ける男だ。せつかく広尾なんて刺激ある暇で働いてるわりに、まっすぐ家に帰るんだからな。同僚の誘いも聞く耳持たず、まっすぐ家に帰っちゃう。そう、金曜日の予定は初めから決まってるのさ。日比谷線の市内で、決まったようにリスト作成をするのが彼の金曜日なんだ。少しくらい習慣を変えても良さそうなのにな。

しばらくして彼は、ブリーフ・ケースから小さなメモ帳を取り出した。そして予想通り、お決まりの箇条書きを記していった。一週間分の洗濯・食器洗い・休日の献立表と買物メモ——とまあ、だいたいこんな具合だ。そしてその他に定期的な買物もリストに加えられることになる。今日はなんだ？ 切れかかった豆電球の購入

？ 本當くだらない奴だよ、まったく。

そして彼は完成したリストを指でなぞり、書き漏れのないことを確認するんだ。肯き、少し微笑んだなら、完成した証拠だ。

リストの完成は彼にとつて重大な意味を持つている。少しの書き漏れも許されなからだ。そしてすべきことのない休日、彼は休息に充てるのだ。——丸々二日間の休息。それ以外はあり得ない。それが彼の主義なんだ。決まりきつた彼の休日

彼は週末に、まるで自分をリセットさせるみたいに休むんだ。そうすることで同じような毎日を送れるって信じてるんだね。同じ色の下着に、同じ柄のカッター・シャツ。何から何まで一緒なんだ。穏やかな日々が好きなんだね。違う下着を着けたつて、ハラハラしないだろうけどさ。

俺は、出来ることなら忠告してやりたい。休息も大事だけれど、そろそろ気づいた方が良さつてさ。休息からは何も得られない。変化のない、偽りの自分以外にはなれないんだ。

彼を乗せた電車は日比谷駅へと着いた。そこから有楽町の電氣屋まで徒歩で向かう。リストに記載された通りトイレの豆電球を購入する為だ。

やれやれだ、トイレの豆電球。

有楽町から京浜東北線へ乗り換え、リストから豆電球の購入項目に斜線を入れた。そこでふと思いつき、リストに友人への手紙、先日食事したガール・フレンドに電話という項目を追加した。けれど、少し経つてからガール・フレンドの項目に同じく斜線をした。きつと彼はもう一度食事に誘うことによつて、あるいは彼女に何らかの期待をさせてしまっただろうと考えたのだから。期待は次なる期待を生み、行き先不明の旅となる。彼はそれを恐れているのだ。ハラハラ・ドキドキするのが嫌いなんだね。それに彼も、自分で分かっているとは思っけれど、結局はその食事プランについて一行たりともリストに書くことが出来ない。一行たりともだ。それは当然のことなんだ。彼が変化を求めないんだからさ。彼は今の生活を、何ひとつ不自由のない満ち足りたものだどと錯覚しているようだけど、実際はそうじゃない。そんなはずはないんだ。まあ、俺が言ったところで聞きやあしないだろうけどさ。

彼は広尾にある広告デザイン会社でDTPとして働いている。来る日も来る日も営業担当が背負い込んでくるデザイン案のフォントをいじつたり、プレゼンテーションに使うパネルの作成を行っている。帰宅は概ね二十三時をまわるから、平日は外食か惣菜を食べていた。だから彼が、自分で料理するのは休日だけだ。そして

今、彼はアパートがある兩國のスーパーで買い物カゴ片手にリストを見つめていた。レタス、イタリアン・ドレッシング、卵のパック、食パン、ミルク、ホール・トマト、ケチャップ、ナスどうも彼はバスタをつくるつもりらしい。悪くはないけどさ、冷蔵庫には手つかずのドレッシングが眠っているのを思い出した方がよい。

家に帰ると彼は、一週間の間に溜まった大量のカッター・シャツと下着の洗濯をし、簡単なサラダと少々茹で過ぎたバスタをコーヒーで胃に流し込んだ。食事を終えるとラジオでFMを聴きながら掃除をし、シャワーを浴びてビールを飲んだ。いつもの見慣れた金曜日。何も変わらない、平穏な日。目新しい行動は豆電球の購入と、友人に宛てた手紙だけだ。電球は取り替えられ、手紙は既に切手が貼られている。

リストを全てやり終えた彼は、とても幸せで満たされた気持ちになる。思い残すことはなく、休日は手付かずなままだ。

全ては何事もなく終わろうとしていた。彼は歯を磨き、死んだ作家の小説を繰っていた。あと二ページほど読めば俺をケースにしまおうだろう。俺はなんだか消化不良でも起こした気持ちでその時を待っていた。しかし、突然彼の携帯電話に着信があった。しかもそれは、あの愛嬌のあるガール・フレンドだった。俺は彼が電話に出ない方に賭けた。いや——出たとしても、すぐに彼は切るだろう。彼女との電話は、彼のリストに載っていないのだから。

しばらくして電話を終えた彼は、リストに「彼女と一緒に美術館」と追記した。美術館だつて？ まいったね。まさかリスト外の行動をするとは思わなかったよ。けれど、正直言って安心したよ。彼女にお礼を言わなきゃな。だつてそうでなきゃ、また俺は同じ景色を見る羽目になっちゃう。この何ひとつ変化のない六畳間をだ。まさかアンリ・ファンタンⅡラトゥールを見ることになるとは思わなかったけどさ。彼は予定通り小説を読み終え、いつもの手つきで俺をケースにしまい、安らかな寝息を立てた。

——相棒よ、良い眠りを。心配すんな、明日はきつとうまくやるさ。今の君に思い残すことなんて何ひとつない。食器洗いも、同じ柄のカッター・シャツの洗濯も何から何までやっちゃまったんだ。なあ、そうだろう？ だからリストは白紙で良いんだ。何が起るかわからない。変化は必然で、人はハラハラ・ドキドキなんだ。だからおもしろいんだろう？

memoirs.06 『リセットの日』

短編集vol.01 『幾つかの小綺麗なレストラン』より

<http://p.booklog.jp/book/44077>

著者：延藤 詩喜

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/shiki2501/profile>

Blog：<http://coffee-and-cigaretechocolate.blogspot.com/>

Twitter：<https://twitter.com/#!/shiki2501>

Facebook：<http://ja-jp.facebook.com/people/Shiki-Endo/100002495981910>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44077>

ブックログのパーパー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44077>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.